



第6回

モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2010年5月16日(日)

◆開演◆ 14:30 ◆

会場: ザ・ハーモニーホール
<小ホール>

(松本市音楽文化ホール)

主催: モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

共催: 長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・松本交響楽団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あづみの音楽祭

後援: 松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会

信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団



よこしまかつと

ヨーロッパに神童旋風を起こしたモーツァルト一家。

大旅行を終えて更なる野望を父・レーオポルトは抱きますが、そこには様々な大きな試練が一家を待っていました。

第6回を迎えた全曲演奏会。今回は神童神話のその後をお伝えします。

レーオポルトの野望と失望

1766年11月29日、モーツァルト一家は大旅行（第3回全曲演奏会プログラムノート参照）を終えザルツブルグに戻ってきた。一家の旅は3年5ヶ月と20日に及び、馬車での行程は何千キロにもなり、この間に泊まった都市の数は（再訪を含めて）88都市、演奏を聴いた人は何千人という数に上った。レーオポルトが故郷を出たときは、評判の良い、注目される人物、といった程度の評価だったが、ザルツブルグに戻ってきたときには、彼はもはや国際的な有名人となっていた。

レーオポルトとその子供たちは、音楽史の上に新しい一章を書き加えると同時に、ヨーロッパのいたる所で予想をはるかに越えた祝福を受けたのだった。それから何十年も経って、往時を回想する人たちは、モーツァルト少年の演奏が神技的な名人芸だったことを口にする。

ゲーテは1830年になってもなお、1763年の8月フランクフルトで行なわれた演奏会のことを思い出して語っているが、彼は“カツラをつけ、帯剣した小さな坊や”のことを鮮明に憶えていた。この“子供のモーツァルト”の像は、西欧文明社会の伝承の中に、永久に入り込んでしまった。

【ふたたびウィーンへ】

レーオポルトはザルツブルグに戻ったその日から子供たちの能力を見せるための次の旅行のことを考えていた。現実的な眼で見れば、時間の利が自分の側にないことを彼は認めざるを得なかった。子供たちが成功を収めたのは、まずひとつに子供たちが幼かったこと、その演奏のもの珍しさにあったことは、彼にはわかり過ぎるほどわかっていた。ところが、娘はすでに17歳、息子はまもなく12歳になろうとしている。ことはどうしても急がねばならなかった。

1767年の秋、ウィーンではナポリ王フェルディナンドとオーストリア皇女ヨゼーファの結婚祝賀会が計画されていた。レーオポルトはいまこそ子供たちの演奏によって名と実利とを得る絶好の機会だと考えた。

1767年9月11日、モーツァルト家の全員は自家用の馬車に乗り、ベルンハルトという召使を連れてザルツブルグをあとにし、ウィーンに向かった。途中リンツ、メルクを経由し15日にウィーンに着いた。ウィーンでは、王家の人たちが急いでモーツァルトに会う様子にはなかった。

一家がお召しを待っている間に天然痘が流行し始め、花嫁が感染し10月15日に急死したのである。ウィーンは一朝にして歓喜が悲嘆に変じた。子供たちが天然痘に感染することを恐れ、レーオポルトは家族を連れて避難することを考え、10月23日にチェコのブルノに到着した。

【ヴォルフガングの失明】

ブルノに着いた3日後の10月26日、一家がオルミュッツに移動したところで、ヴォルフガングに天然痘の徴候が出はじめた。「ヴォルフガングは眼で訴えてきます。彼の頭は熱く、頬も火照っていて真赤なのに気がつきました。そこで黒糖を与え、ベットに寝かせました。夜どおし落ち着きませんでした。朝になっても熱は引きません」。レーオポルトはザルツブルグの人を驚かすまいとして明らかに最悪の事態については筆を控えているが、実はこのとき一時的にモーツァルトは失明したのだった。そのことは1800年になって姉ナンネルが語るまでわからなかった。「あの子は天然痘にかかり、症状が重かったので九日間も目が見えず、治ったあとも何週間かは目をかばっていました」。彼が回復しかけていた11月10日、今度はナンネルが同じ病気になり、回復まで3週間を要した。

【期待はずれのウィーン再訪】

皇帝とマリア・テレジア、ザクセンのアルバート公爵や王女たちがモーツァルト家をようやく宮廷に呼んでくれたのは年も明けた1768年1月19日のことで、一家は4ヶ月をむなしく過ごしたことになる。好意的な歓迎を受けた一家ではあるが、残念なことにこの王家の示した熱意ほども現金に化けることはなかった。モーツァルト家の受領したものはさほど値の張らぬメダルが一個だけだった。「皇帝は明らかにお金のかかることは何でも嫌なのです。そして、まちがいでなく、私どもにやんごとないお言葉を賜ったことで支払いは済んだと思っておられるのです」とレーオポルトは不満を述べている。こうして一家は大した収入もなしにウィーンに滞在していたことになった。レーオポルトは書く。「私たちはこの都でたくさんつかってしまいましたが、それを取りかえす望みはほとんどありません」モーツァルトがこのオーストリアの首都では熱狂的な騒ぎを起こせなくなっていたのは明らかである。おそらく、彼は神童役を演じるには齢を取り過ぎていたのであろう。手品の種も使い古したものになっていたのであろう。おそらく彼はずっと高級な芸術家になっていたのだが、ウィーンで人気を爆発させるには高級であることは必要なかった。こうした状況のもとで、レーオポルトは経費をカットすべく、帰郷を考える。ところが思いがけないことからレーオポルトにインスピレーションがひらめき、がらりと作戦を立て直すことになる。皇帝(ヨーゼフ2世)がモーツァルトにオペラを書くつもりがないかとたずねてくれたのである。ただちにレーオポルトは勝利の光景を思い描いて有頂天になる。ただこれが更なる誤算を生みマネージャーとしての彼の商売が、大きな打撃を受けることになってしまうのであった。



- 交響曲 へ長調 Sinfonie in F KV43
(11歳 1767年秋か12月 ウィーンで着手、オルミュッツで完成)
Allegro, Andante, Menuetto-Trio, Allegro

【初四楽章シンフォニー】

自筆譜は美しく書かれた清書譜で、ヘッドには「ヴォルフガング・モーツァルトのシンフォニア、一七六七年、ウィーン」と書かれている。この「1767年」の上には(明らかにレーオポルトの手で)「1767年、オルミュッツ」と書かれたが、これは後に線を引いて抹消された。

モーツァルト一家は北モラヴィアのオロムツ(オルミュッツ)に、一度だけ、不幸な理由から滞在した。それは1767年10月26日から12月23日にかけてのことだったと思われる。彼らはウィーンで猛威を振るっていた天然痘を避けて当地にやって来たのであるが、結局ナンネルもヴォルフガングも、病気にかかってしまった。研究家アルフレート・アインシュタインはケツヒェル第3版において、自筆譜への上記の書き込みを根拠に、KV43は秋にウィーンで書きはじめられオルミュッツで完成されたか、あるいはオルミュッツで書きはじめられ12月の終わりにウィーンで完成されたと判断した。ケツヒェル第6版の編者もこれに従っている。しかし1767年12月の終わりにウィーンで完成、ということはありません。

なぜならば確かにモーツァルト一家は12月23日頃オルミュッツを後にしたが、ウィーンに到着したのはようやく年が明けて、1月10日になってからである。ウィーンに戻るのに時間がかかったことには事情があった。ブルノでのコンサートのためである。そのときの模様がが当地の聖職者の日記に的確に記述されている。

—その夜・・・町のとある家で開かれたコンサートに行った。「ダヴェルナ」として知られるところである。十一歳のザルツブルグの少年と、十五歳になるその姉がブルノの住民によるさまざまな楽器の伴奏で演奏し、皆の賞讃を得た。しかしその少年は皆と調子の合わせることのできないトランペット奏者たちには我慢できなかったようである。—

ヴォルフガングが幼少時、トランペットの音に極度に敏感だったことには、ほかにも証言がある。したがって彼の反応を綴ったこの言葉には真実味があるように思われる。

KV43の成立については次のようなシナリオを提案できるのではないと思う。このシンフォニーは1767年9月15日から10月23日の間にウィーンで着手され、ヴォルフガングが天然痘から回復した後、オルミュッツで完成された。オルミュッツでの作業は、改訂ないし再筆写と呼ぶべきものであったかも知れない。曲は12月30日にブルノでおそらく初演された。1767年末以前に年代付けできる確実な真作シンフォニーはどれも三楽章構成であるから、KV43はとりあえず彼が書いた最初の四楽章シンフォニーとみなすことができよう。

- 交響曲 変ロ長調 Sinfonie in B KVAnh. 214(45b)
(12歳 1768年初旬 ウィーンで作曲(アルフレート・アインシュタインによる))
Allegro, Andante, Menuetto-Trio, Allegro

シンフォニーKV45bはケツヒェルがブライトコップフ社の目録で第1楽章の冒頭譜例しか確認できないまま付録に収めた10曲のシンフォニーの中の1曲(第2番)である。ケツヒェル第3版の出版に先立ってアインシュタインはベルリンの図書館を調査し、18世紀に作成されたと見られるこの作品のパート譜セットを発見した。このパート譜の出所は不明であるが、現在では1800年頃の作成と見なされている。

【身元の確かな資料はなく、作曲家・成立時期ともに未確定】

KV45bはモーツァルトの手による1764年～66年の7曲のシンフォニーと各楽章の長さ、形態、様式においてさまざまな共通点（メヌエットとトリオがあること以外）をもっている。今日演奏するKV43や1778年にウィーンで書かれたシンフォニーとは共通点が少ない。

それゆえこの作品はザルツブルグ時代の1767年に、とりあえず位置付けされてきた。しかしアインシュタインのようにいちばん「遅い」可能性として1768年の初めをとる考え方もできないわけではない。

より確実な証拠が発見されないかぎり、KV45bの作曲年代と作曲地に関する疑問は、解消できぬままである。ひょっとすると真の作曲者を問題にすることも、できるかも知れない。

●交響曲 イ長調 Sinfonie in A KV134

（16歳 1772年8月 ザルツブルグで作曲）

Allegro, Andante, Menuetto-Trio, Allegro

KV134の自筆譜には、いつも通りの役割分担によって、ヴォルフガングが「シンフォニア」と頭書し、レーオポルトが「騎士アマデーオ・ヴォルフガング・モーツァルト作、1772年8月ザルツブルグにて」と書き加えた。KV128、129、130、132、133、134のシンフォニー6曲が1772年の5月（初めの3曲）7月（次の2曲）、8月という日付まで書かれているところからすれば、シンフォニーを必要とする差し迫った事情があったに違いあるまい。レーオポルトはライプツィヒの出版社ブライトコップフ宛てにこんな手紙を書いている。

「私達は十二月十五日にミラノから帰着しました。息子は今度も劇場用セレナータの制作で大いに名声を博しました。…略… 九月の末まではザルツブルグに居ります。その後三度目のイタリア旅行に発ちます。そこで息子に何か出版させるならそれまでが一番良い時期と考えます。あなたが欲しいと思われるジャンルを言って下されば、ご連絡があり次第彼は作曲するでしょう。」

KV134のオーケストレーションは最小規模の編成ではあるが、サン＝フォアはその結果を「驚くほど想像力に富み、詩的である」と見なしており、スタンリー・セイディもそれを「モーツァルトの作品の中でも最も精密に議論されたものの中に」数えている。

冒頭楽想ないし第1主題の再現を楽章の終わりまで取っておくことによって締めくくりの効果を上げる、という手法が注目されるが、これはミヒャエル・ハイドン（第5回全曲演奏会プログラムノート参照）の交響曲にも時折見られものである。 <FF（フォルティシモ）の使用やGP（ゲネラルパウゼ）を採用にも注目>

この1772年に書かれた有名な連作は弦楽のための3曲の「ディベルティメント（KV136、137、138）」である。三楽章からなるこれらの作品は弦楽五重奏ないし四重奏の編成によるものなのか、弦楽合奏によるものかにわかに決定しない。KV 134が書かれた8月にはモーツァルトは従来は無給のコンサートマスターから有給のコンサートマスターに昇進している。

年額わずか150グルデンにすぎなかったものの彼はその時わずか16歳であった。

- ★参考文献 「モーツァルト」メーナード・ソロモン著、「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著、「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著、「モーツァルトの世界」スタンリー・サディー著、「モーツァルトの生涯」海老沢 敏著、